

空



2004年

**SORA**

8号

晴夜

(8)

—1

柴田 佐知子

玄関に月光の道来てみたり

実直に生きて案山子となりたるや

大樹なほ伸びゆく小鳥来たりけり

稲架解きし対馬に山の押し合へり

魚屋の鱗しぶきや十二月

—「俳句」十二月号より—

夜も尖る獣らの牙葛の花

博多駅通り抜けたる秋思かな

鳩を吹く滅びの址は平たくて

## 無花果

高倉 和子

天高し色の飛び出す大漁旗

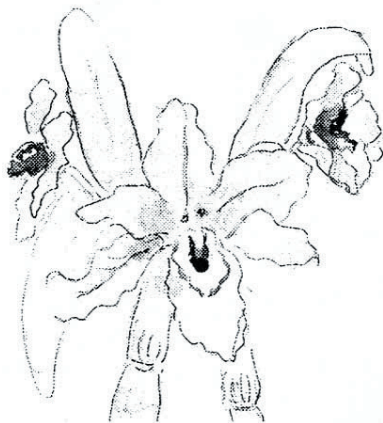
芋の葉に大ぶりの雨来たりけり

木の実降る三角定規使ひしころ

泣き虫のまた泣かされて胡麻の花

鍋につく土も焦げたる芋煮会

迷ひたくなるほど揺れて花芒



無花果を厨の端で食べてをり

覗かれてゐるごと葡萄棚の下

秋思かな声なく笑ふこともまた

霜降や青空広きまま暮るる

少年の夜を眠らず冷まじき

中高き墳墓や鳥の帰るらむ

山肌の冷めゆく秋を惜しみけり

終りまで知らぬ校歌や冬紅葉

湖に鳥の影濃き十二月

最近、会社の出張で大阪へ行く機会が増えた。出張といつても経費節減の折柄、日帰りが多い。早朝の新幹線に乗り、会議に出席して、また夕方の新幹線へ、博多駅に着くのは夜十一時近くである。何度か繰り返しているうちに、だんだんと馴れてきたような気がする。大阪へ向かう朝の車内はスーツを着たサラリーマンばかりで、みな新聞を読むか、仕事の資料に目を通していて、これから仕事に向かう緊張感が漂っている。私も例に漏れず、これから出席する会議のための書類確認に忙しい。

帰りは七時くらいの新幹線に乗ることが多い。朝は緊張？していたサラリーマンの方たちも仕事が終わった解放感からか、みなビールと弁当を手ににぎやかな車内となる。またまた例に漏れず私もその中で何の違和感もなく会社の上司とビールを飲んでいる。そして心地良い疲れとともにいつの間にか静かな車内となり気が付いたときには博多駅終点である。

## 秋の炉

中田みなみ

けふの宿如何にと秋の一輛車

炉火吹きて待ちくるるなり虫の宿

露けしや灯し透けたる竹細工

もてなしの炉火たけなわの秋気かな

山好きにどの山も郷里さと秋夕焼

行燈に屋号夜桜草増やし



今迄に丁度十一冊の句集を編集した。内五冊は私が序文を、残る六冊のうちの一冊は（故）細川加賀先生に、あとの五冊は伊藤通明先生の序文を頂き、私は跋をお受けした。その中には故人となられてからの上木も多い。

如月のなにも変らぬ机上かな

昭和六十二年三月末日没の大滝大和さんの作品で、クールに死をみつめたこの句のやり切れない無常感が以来私を離さない。

安永佳江 三句・肺癌再発

陽炎や行けるとこまで行くつもり

対岸の揺れは通草か足湯して

月光や座禪に適ふ岩一つ

白波の音ありてこそけふの月

満月やこちら向きたる弓狭間

衣被つるりと落ちし僧の膝

寺山の藪のうねりや桑括る

立寄りて薪割りてをり鮎売

掌にひびくホース伸ばして天高し

空澄めり水を替へたる小鳥籠

あきらめて強くなりたり冷奴  
天高く嘘など言へぬ蒼さかな

ご主人はこの最後の句を墓碑に彫られた。

林 潤子 四句 手術後

四月馬鹿あの世とやらを垣間見て

またとなき明日来さうな梅雨夕焼

秋茄子の色に見とれてみたりけり

あの夢の続きを見たし夜の雪

遺句集の題名を『夢の続き』にした。

又、当時八十二才の本郷きみ子さんは無欠席がご自慢で、若し二ヶ月欠席の時は、あの世に旅立ったと思つて下さいと仰つていたが、その通り気づかぬ間に亡くなられた。その前年の作品中に讃を惜しまない二句がある。

なにごとも臆となりて生き易し

見馴れたる家内ぢやながめ秋深し

最後にもう一句付け加えたいのは、私の初学の頃の師、故椎木嶋舎の病臥中の句。

「掌にのせて白桃はただ水の重さ」である。

## 霜 降

高 千夏子

わが<sup>しよつ</sup>生はいま午後二時の酔芙蓉

ものや思ふと問ふまでもなし酔芙蓉

開くとはゆゆしきことぞ秋扇

地蔵會の闇となりたるなまこ壁

借物競争あらまあ禰官が走らされ

葛の花嗅ぐたび眼窩窪みさう



荒井千佐代様へ

「空」七号で、書かれたお悩みは解消されましたか？明るく、健康な詩精神の貴女様、しかも敬虔なクリスチャン。もうお元氣と存じますが、私こそ悩みの深い人間です。眦を吊り上げて、生きる日々。涙をすっかり忘れていきます。過日、敬老日で市主催の地区の敬老会に、骨粗鬆症になつてから益々出不精になつた母に無理に参会してもらうべく一緒に行きました。近くの中学生達がボランティアで接待してくれ、皆優しい心配りの子達でふつと胸が熱くなり涙ぐんでいる自分を発見。母も楽しそうでした。

疲れて、時々生きているのが辛くなり



暮れてゆく秩父青石男郎花

地芝居の和事くねくねく〜と

地芝居の海老様にして荒漁師

松手入鯉が水輪をつつしめり

祝母八十四歳

来し方を悔やむといへど一位の實

霜降や宗家紫紺の鼓の緒

ブラックバスばかりの魚影神無月

パッチワークの出来ばえ見んと小鳥来る

腹臆のなく螭螂の枯れにけり

ます。そんな時、私は禅宗の書「十牛図」や、サレジオ会司祭の金子賢之介神父様の書「風いつも吹く日々」を読みます。この神父様は、仏教にも深い理解を示され、その求道精神には心を打たれます。「十牛図」は牛を探して旅に出て、連れて戻りさて目的は達した。もう何も無い。そして、十番目は又、間抜けた姿で「何かを」求めるべく街に出るという繰り返しの話です。私は、拙句集「真中」にこれを主題に十句入れました。青山俊董という尼がおいでです。以前、この欄にも書きましたが、五歳で仏門に入られた方。この尼様に十句が野狐禪になつていそうで、ご叱声をとお願いしました。ご返事は「大いに悩みなさい。十牛図は私にも一生の課題です。」と書いて下さいました。マザーテレサを助けて、一緒に活動された尼様がです。私は、生きるとはそういうものと改めて思いました。俳句は、喜怒哀楽すべてが詠める文芸です。俳句形式を信頼して、前向きにお互い生きていけますね。「悩み、また良し」です。

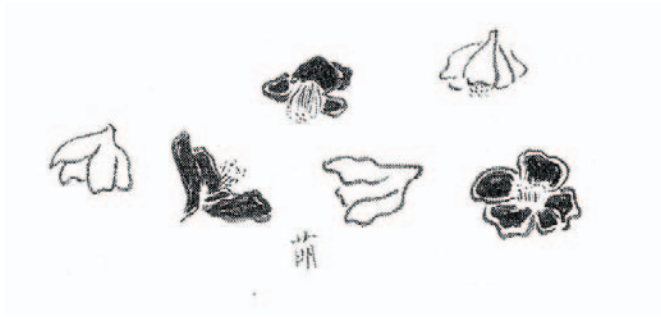


空集

柴田佐知子選

鏡より打つて出でたる大暑かな  
茎赤き草の力や大旱  
婚近し母の日傘に素直に入る  
鳥風や坐り直して彫刻師  
黒帯はひと葬るいろ風の盆  
秋晴の掘り出されたる根の緻密  
一円に木犀の香や夜の地震  
すれすれに薄の株とすれちがふ

服部早苗



甘鯛の頬つややかに並べらる  
高村淳

眠られぬ母に葛溶く月明り  
愛犬に毛布ゆづつてしまひけり  
コスモスや頭大きな童仏  
噴水のしぶきに濡るる駅広場  
大噴水変はるをしほに別れたる  
鶏の来て蹴散らかす厄日かな  
辻兎夢  
薦這つて少年いよよ閉ぢこもる  
墓道の右も左も糸とんぼ  
鶏頭のぶつかる道の墓参かな  
田一枚街に残りし鬼やんま

**無花果を厨の端で食べてをり**

高倉 和子

無花果が渡来したのは寛永年間というから、徳川家光の頃である。以来すつかり日本に馴染んだ無花果は、我が家の裏庭にもあった。その頃は買つて食べるようになるとは思つてもいかなかった。厨の端で食べてをり」はまさに無花果の景だ。二つに割つて歯応えなく食べるときの、どこか翳るような思いをこの句は把えている。さりげない表現のうまさである。

**すれすれに薄の株とすれちがふ**

服部 早苗

秋の風情溢れる薄は、触れるとすつと肌を切ることもある。一叢の薄の横を行き過ぎたのであるが、「すれちがふ」と表現したとき、薄は不思議な存在と化す。また「すれすれ」「すすき」「すれちがふ」という「す」の重なりが絶妙の効果をあげ、薄の葉の質感までも伝える。優れた感性である。

同じ作者の〈婚近し母の日傘に素直に入る〉には小津安二郎の映画のような静かな情感が流れる。

**愛犬に毛布づつてしまひけり**

高村 淳

何とも幸せな犬である。ご主人様の毛布をいただいたのであるから。作品には当然ながらその人となりや滲んでくる。そうでなくてはまた面白くない。優しい淳さんのお下がりの毛布で、愛犬はあたたかい眠りについでいるであらう。「毛布ゆづつて」も楽しい。

**鶏の来て蹴散らかす厄日かな**

辻 鬼夢

「蹴散らかす」と鶏の様子を活写。一気に詠み下ろして勢いがある。それを更に生かしているのが季語である。「厄日」とは立春から数えて二十十日目。この頃は稲の花時であるが、颱風発生の時期でもあり、農家では「厄日」として警戒する。土や糞を蹴散らかす鶏と厄日とが強く響きあい、生き生きとした作品となった。〈鶏頭のぶつかる道の墓参かな〉も佳句。

**露のせて五十余貫の力石**

田島 洋子

力石は力試しに抱えあげる石である。五十余貫であれば約百九十kgほど。抱え上げるとなると大層な重さである。〈金剛の露ひとつぶや石の上川端茅舎〉は露に焦点が絞られていくが、この句はどんと置かれた力石に眼が定まってゆく。具体的な五十余貫の表出が生きた堂々たる句である。「露のせて」も良い。

**合掌のひとり木曾の時雨かな**

長田 憲一

祈りの手を組む一人に時雨が走る。「木曾の時雨」と言うことで「合掌のひとり」の向うに木曾の檜山杉山がひろがる。墨絵の如き日本の景である。〈案内の旗より高し鴉の声〉は「旗より高き」と言い切ったことで、突き抜けるような鴉の声が詠みとめられた。

**束の間の夢も見まじやう十三夜**

千谷 頼子

束の間の夢であれば、それはそれで佳しという唄うような調べが艶である。千谷氏は糸島在住の新人の一人。他の七人も自在な詠みぶりで瑞々しい。